

人間を考える

2022年10月27日

住吉 誠 教授

(英語学)

英語のイディオムに見られる非合成性 一言語のもつ「合成の誤謬」

経済学に「合成の誤謬」という考え方があり。ミクロのレベルの正しさが、マクロのレベルの正しさに繋がらないことをいう。個人のレベルでは正しい行動でも、全員がそれを実行すると悪い結果が生じる。経済状況の厳しい昨今、一人ひとりの貯蓄や節約はミクロのレベルでは正しい。しかし、マクロのレベル、すなわち国全体で考えると、消費低迷や国民の総所得の減少につながる。1+1が2ではなく、-1にも-2にもなる。

認知言語学の分野には、ゲシュタルト心理学にもとづく「全体は部分の総和以上のものである」という考え方があり。単なる点の集まりが顔に見える。誰しも経験することである。本来は、点の集まりは点の集まりでしかない。つまり1+1は2であるはずである。しかし、集まった点が全体として顔に見える。1+1が2ではなく、3にも4にもなる。この「全体が部分の総和以上になる」という認知のしくみは、言語の在り方にも反映されていると考えられており、言語が示す不規則・慣用(idiomatcity)への志向性の源泉になっている。

英語を学ぶとき、「これはイディオムだ」といって表現を丸暗記する

ことも多い。「イディオム」の例として、英語学の本でよく引用されるkick the bucketという表現を考えてみよう。これは、dieを意味するイディオムである。この表現に現れるそれぞれの単語、つまり、「蹴る」「その」「バケツ」を足し算すると「そのバケツを蹴る」という意味になるはずであるが、全体はそのような意味にはならない。イディオムでは、それを構成するそれぞれの単語の正しい意味を積み重ねても、全体で正しい意味は出てこない。このような現象を、英語学(言語学)では「非合成性(non-compositionality)」と呼んでいる。換言すれば、英語に見られる「合成の誤謬」と言ってもよいものである。

多くのイディオムにはこのような「合成の誤謬」(非合成性)がみられる。by and large(一般的に)、come a cropper(失敗する)、take after(似ている)など、どれも1+1が2にならず、全体が部分の総和以上の意味を表している。

ある英文記事の中でI said that they are the salt of the earth.という文に出くわした。ミクロのレベルで単語を足して出てくる意味は「地の塩」という意味である。これは聖書マタイの福音書に由来する表現であ

るが、今では「世の中で役に立つ人」の意味を表す。つまり、この表現も全体が単語の意味を足した以上のものを表している。

近年の研究では、このような非合成的イディオムと合成的定型表現が言語の大部分を占めているという報告もある。したがって、非合成性、すなわち言語のもつ「合成の誤謬」は、コミュニケーションに大きな貢献をなす、より中心的なしくみであると言っても過言ではない。

「1+1が2ではない」という現象が、英語学にも経済学にも見られるというのは非常に興味深い。他にも「経済性」など、この2つの分野の研究は類似する考え方に着地することも多い。経済学は、モノや貨幣、サービスといったものを通して人間の活動を見る。一方、言語学はことばを通して人間の活動を見る。どちらの分野も人間活動を扱っており、さまざまな学問を横断的に学ぶことは、新たな「気づき」をもたらししてくれる。専門以外のことも広く学ぶことで、知の地平が広がり、離れていた知の島がつながっていく。「人間を知る」ことは非常に心躍る経験であることを再認識する。